

小学校

平成 17 年 度

教育研究員研究報告書

特 別 活 動

東京都教職員研修センター

目 次

I	主題について	-----	2
1	主題設定の理由		2
2	「豊かなかかわり」について		2
3	「ともに生きる力」について		2
II	1・2・3年分科会	-----	3
1	主題設定の理由		3
2	研究構想図		4
3	研究の内容		5
4	成果と課題		9
III	4・5年分科会	-----	10
1	主題設定の理由		10
2	研究構想図		12
3	研究の内容		13
4	成果と課題		16
IV	6学年分科会	-----	17
1	主題設定の理由		17
2	研究構想図		18
3	研究の内容		19
4	成果と課題		23
V	研究の成果と課題	-----	24

豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動**I 主題について****1 主題設定の理由**

人とかかわることを面倒だと考える。また、自分の考えだけに固執し、友達の考えを受け入れることを苦手とする児童が見られるようになってきた。また、休み時間にひとり遊びや2・3人で遊ぶことを好む児童や、自分の思いや考えを十分に伝えられないことからささいなトラブルを自分たちの力で解決できない児童も増えてきている傾向がある。

児童を取り巻く環境は、様々なメディアの急速な発達や、少子化における大人の過干渉や放任などの影響で、他者との望ましいかかわりを重ねる経験が減ってきている面も見受けられる。これは、自分の思いや考えを伝える場面や、自分の存在を認めてもらうことが少なくなることにつながり、「人とかかわる力」を伸ばすことができなくなっている原因でもある。

そこで、本部会は、特別活動のねらいを踏まえ、児童が人とかかわり合う場面を増やし、多様化することで「人とかかわる力」を育成し、「ともに生きる力」をはぐくむことを研究の目的とし、上記の研究主題を設定した。

2 「豊かなかかわり」について

研究を始めるにあたり、学級活動における児童の様子を改めて観察することにした。その結果、「人との望ましいかかわり方や、かかわりを通して課題を解決する」という経験が不足しているという課題が明らかになった。

人とかかわる意欲を育てるためには、意見を出し合い、実現する楽しさを味わう経験は、欠かせない。その点から、「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度の育成」をねらいとした特別活動の役割は大きい。

特別活動は、望ましい集団活動を通して、互いの必要性を感じ、共感し合う経験を積み重ねる中で「自分もよく、友だちも楽しい」と実感させることができる。また、今回の研究では、特別活動においてより有意義なかかわりを実現するために、他教科等での学習も視野に入れて「豊かなかかわり」の場を作り出すことが大切であると考えた。

3 「ともに生きる力」について

望ましい人間関係を築くためには、一人一人が自分の存在価値を認識するとともに、相手の存在価値を受け入れ、認めていくことが大切である。このことを実現するためには、自分の思いや願いを伝えるとともに、相手の思いや願いを受け止め、ともに願いを実現するよさを実感する経験を積み重ねることが必要なのである。

本部会では、互いの存在を認め合い、望ましい人間関係を築きながら、互いのもつ力を生かし協力して生活する力を「ともに生きる力」と考えた。この力は、人間が生涯にわたって培う力であるため、小学校段階ではその基礎を築くことが重要と考えた。

本部会では児童の社会性の発達と中学校への接続を考慮し、1・2・3年、4・5年、6年分科会の3分科会に分かれ、研究を行うことにした。各分科会では、児童の実態を分析し、分科会テーマ及び目指す児童像と仮説を設定し、それぞれの段階で望まれる「豊かなかかわり」を基に「ともに生きる力」の基礎をはぐくむための実践的な研究を進めることにした。

みんなで夢中になって活動できる児童を育てる指導法の工夫

1 主題設定の理由

現代の子どもたちは、少子化・核家族化・価値観の多様化・家庭、地域社会の教育力の低下など社会の変化にともない、時間的・精神的なゆとりがなく、家庭や地域社会で人間関係をはぐくんだり、体験的に人とかかわりを学んだりする機会が著しく乏しくなっている。

そのため、人間関係が希薄になり、他人に関心をもつこと・人とかかわりをもつこと・我慢することがうまくできない自己中心的な児童が増えているという指摘がある。

このような状況で、特別活動のねらいを実現することは、今こそ重要となっているのである。個性を伸ばし、社会性をはぐくむために、育成すべき資質や能力を明確にして指導することが大切である。

本部会では、児童が豊かなかかわりを通して、共に生きる力をはぐくめるように、研究主題を次のように設定した。

「みんなで夢中になって活動できる児童を育てる指導法の工夫

～ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい体験を通して～

ここでいう「夢中」とは、児童が興味・関心と期待感をもち、自発的・積極的に深く心を注いで活動に取り組む姿であると捉えた。また、「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」とは、児童が活動に対して興味・関心をもち、期待で胸をふくらませながら計画を立て、実践により活動への欲求が満たされ、実践後の振り返りで「楽しかった。また、次もみんなでやってみよう。」と次の活動に向けてさらなる興味・関心・期待感をもち姿と捉えた。

このように「楽しかった。次もまたみんなでやってみよう」と興味・関心・期待を抱かせる望ましい集団活動を積み重ねることによって、児童は徐々に「このクラスでよかった」という所属感や「みんなと一緒なんだ」という連帯感を高め、集団の一員としての自覚を深めていくことができると考えた。このような活動を積み重ねることで、児童の心に「自分を受け入れてくれる集団がある、自分を認めてくれる仲間がいる」という安心感が生まれる。児童は安心感に包まれて、集団の一員としてよりよいものを目指して活動に取り組む、自主的・実践的な態度を身に付けていくと考えた。

そこで、目指す児童像を次のように設定した。

「安心感をもち、みんなで夢中になって活動する児童」

ここで言う「安心感」とは、児童がなんの心配もなく自分らしさを発揮でき、のびのびと集団の中で活動している状態から生まれる気持ちである。このような気持ちをもてることが、活動を始めたり、継続したりするために一番大切な感情であると考えた。

以上のことから、3つの視点を設定し研究を進めることとした。

視点ⅰ 安心感をもち活動に取り組むための工夫

視点ⅱ 「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」といった体験を積み重ねるための工夫

視点ⅲ 「社会・個人的資質評価表」を用いた評価と指導・助言の工夫

2 研究構想図

＜研究主題＞

豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動

＜児童の実態＞

- ・好きなことや楽しいことに、意欲的に取り組むことができる。
- ・友だちの行動や言動に無関心である。
- ・人に言われてから動く。
- ・がまんができない。
- ・失敗を恐れている。
- ・かかわりが少なく、かかわり方が分からない。

＜社会の要請＞

- ・豊かな人間性や社会性の育成
- ・好ましい人間関係の醸成
- ・基本的なモラルや社会生活上のルールの習得
- ・協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度の育成

＜1・2・3年生分科会 主題＞

みんなで夢中になって活動できる児童を育てる指導法の工夫
～ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい体験を通して～

目指す児童像

安心感を持ち、みんなで夢中になって活動する児童

＜研究の仮説＞

安心感をもたせるとともに、「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」といった体験を積み重ねる指導を行えば、児童はみんなで夢中になって活動するであろう。

安心感を持ち、みんなで
夢中になって活動できる児童

視点		社会性をはぐくむために (手だて)	個人的資質を高めるために (手だて)
視点 i 安心感をもって活動に取り組むための工夫	視点 iii 「社会性・個人表」を用いた評価・指導・助言	① 信頼し合える関係をつくるため、「光った言葉」「輝きニュース」を掲示したり学級通信で知らせたりする。	② 「考え・理由カード」に前もって意見を書いておき、見直しをもてるようにする。 ③ 一人一人が活躍できる場を設定する。
視点 ii 「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」といった体験を積み重ねるための工夫		① バリエーションのある集会の活動を取り入れる。 ② モデルやいろいろな例を示す。 ③ 話し合いの形態を工夫する。 ・二人、グループ、学級	④ 確実に取り組めるように、活動のパターンをつくる。 ⑤ 決定権を阻害しないような適切な言葉がけをする。

3 研究の内容

(1) 実態調査

ア 目的

児童には、「人とかかわりが少ない。」「相手に対して思いやりのある言動がなかなかとれない。」「トラブルを解決するにも、大人の力を借りることが多い。」「がまんができない。」という傾向がある。本分科会では、「人とかかわることに自信をもてないでいること」や「友達と遊んだ楽しい経験が少ないこと」が、大きな原因となっているのではないかと考えた。そこで、「人間関係にかかわる自分自身のこと」と「放課後などの過ごし方」について次の調査を行った。

イ 実施内容

人間関係にかかわる自分自身にかかわる項目、放課後などの過ごし方に関する項目について（全35項目）の4つの選択肢の中から1つを選択させる。

* 実施時期：平成17年7月

* 対象者：研究員所属校児童1・2・3年生 955名

ウ 分析結果

A 人間関係にかかわる自分自身のこと

「人と話すのが苦手ですか」の問いに「とてもそう思う」「わりとそう思う」と答えた児童は全体の33%に達した。また、「ケンカをしても仲直りできる」の問いに「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」と答えた児童は全体の25%を占めた。さらに、「こまっている友だちを助けられる」の問いに、「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」と答えた児童は30%に達した。

これらの結果より、約3分の1の児童が友だちとの人間関係に自信をもてないでいるという傾向が明らかになった。

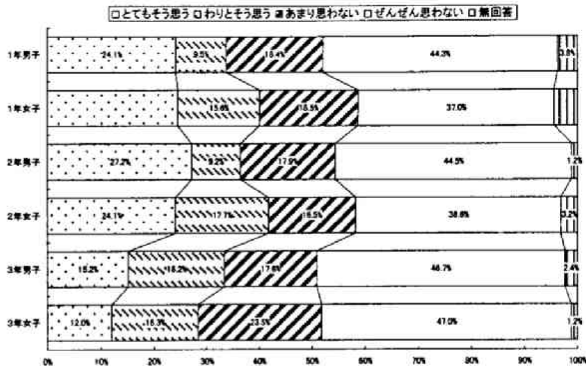
B 放課後などの過ごし方

「遊ぶ時間がない」の問いに答えた児童は全体の65%に達した。これらの原因として「塾や習い事がある」が「とてもそう思う」「わりとそう思う」と全体の約80%の児童が答えており、学年が上がるとその傾向は強くなることが分かった。また、「疲れている」の問いに「とてもそう思う」「わりとそう思う」と答えた児童が全体の60%に達し、これも、学年が上がるに従ってその傾向は強くなる。さらに、「遊ぶ相手がいない」の問いに対して、「とてもそう思う」「わりとそう思う」に答えた児童は、全体の約40%であり、これは、学年が上がるに従って低くなる傾向がある。

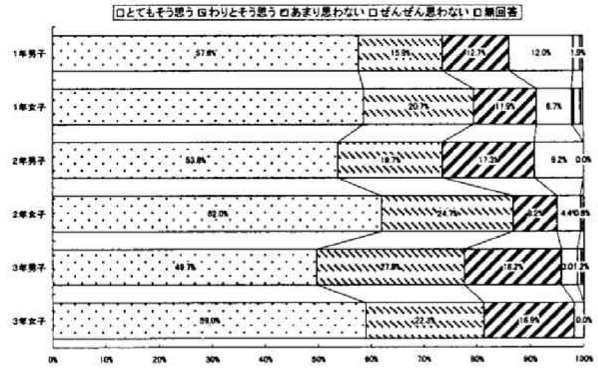
これらの結果より、児童は、遊びたいが疲れている・時間がない・遊ぶ相手がいないという傾向にあることが明らかになった。

これらのことから最近の小学校1・2・3年生は、人間関係を作っていくことに自信をもてないでいること、そのような機会の一つである放課後等の遊びを十分に経験できていない児童が多いことが分かった。そこで、豊かな人間性をはぐくむために、学級会活動において夢中になって活動に取り組むことが大切であると考え、1・2・3年分科会の主題を「みんなで夢中になって活動できる児童を育てる指導法の工夫」に設定した。

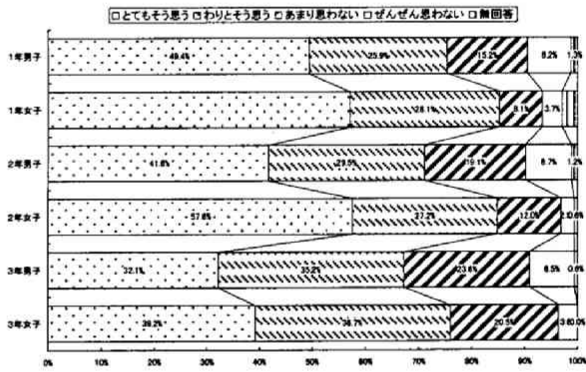
①人と話すことが苦手か



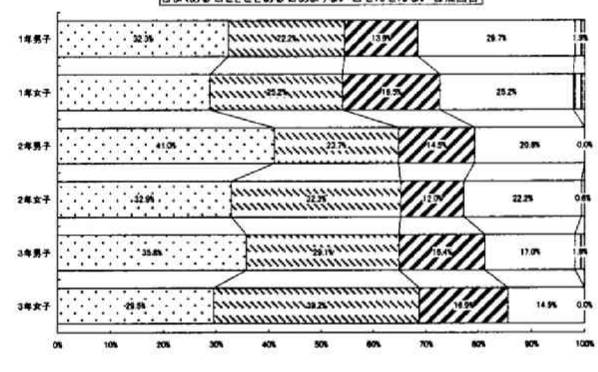
②ケンカしてもすぐ仲直りできるか



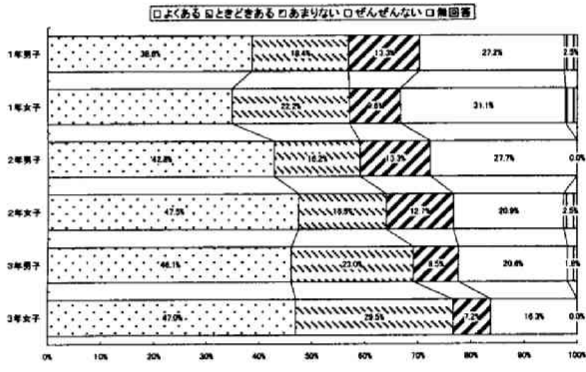
③困っている友だちを助けるか



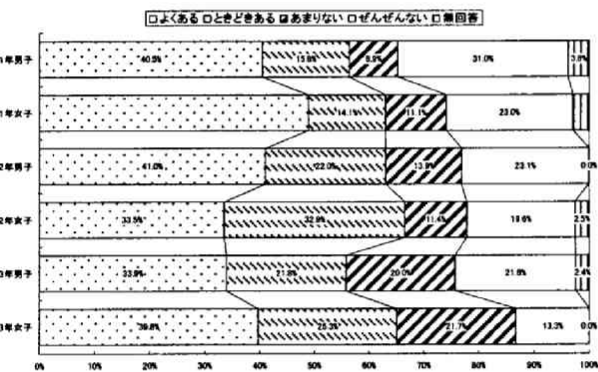
④遊ぶ時間があるか



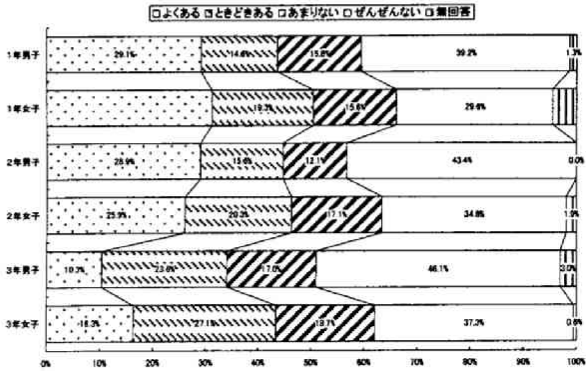
⑤塾や習い事があるか



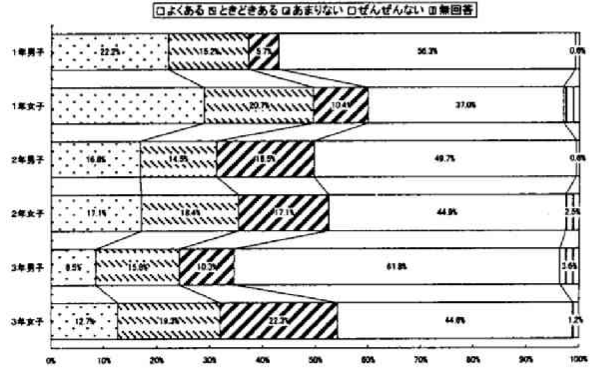
⑥疲れているか



⑦遊ぶ相手がない



⑧放課後遊びたくないか



(2) 研究主題に迫るための研究の視点

視点 i 安心感をもって活動に取り組むための工夫

視点 ii 「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」といった体験を積み重ねるための工夫

視点 iii 「社会・個人的資質評価表」を用いた評価・指導・助言

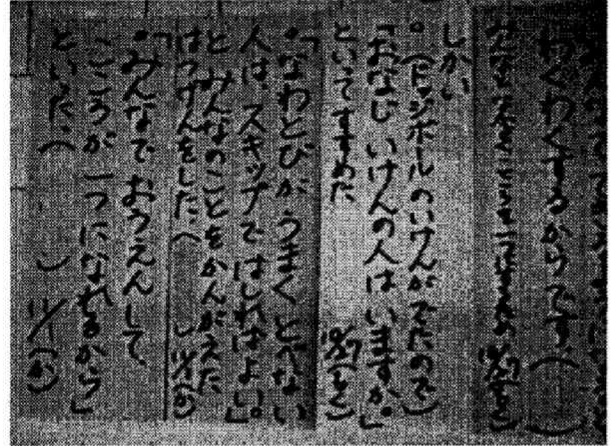
視点 i

安心感をもって取り組むための工夫

社会性をはぐくむために

①信頼し合える関係をつくるため、「光った言葉」「輝きニュース」を掲示したり、学級通信で知らせたりする。

安心して友だちとかかわろうとする意欲を高めるためには、お互いの「よさ」を認め合うことで信頼関係を作り上げ、互いに関心をもつことが大切である。そこで、児童のよかった言動やかかわりの「よさ」を取り上げ掲示することで、より関心をもち合い、友だちの「よさ」を認め合おうとする気持ちが育つと考えた。さらに、右の写真のように掲示することより、児童が話し合い活動の自分のめあて確認することができるようになった。

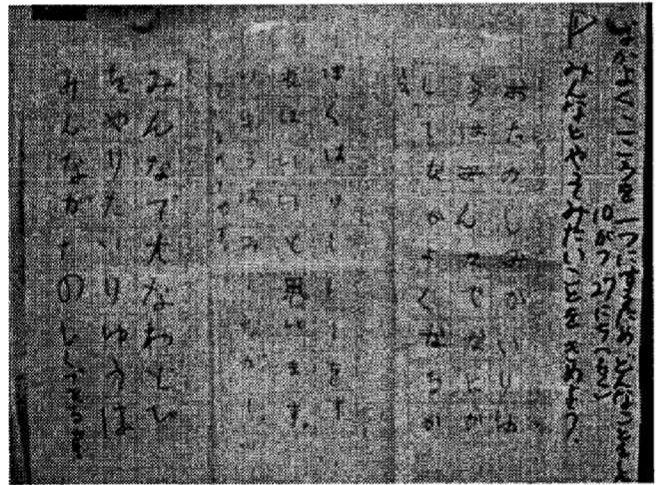


話し合いの中で見取ったよさを掲示

個人的資質を高めるために

②「考え・理由カード」に前もって意見を書いておき、見通しをもてるようにする。

話し合いの際に、大きな声で自信をもって発言できるようにするため、前もって「考え・理由カード」に意見を書くようにする。あらかじめ全員が意見をもつことで、安心して話し合いに参加することができると考えた。また、「考え・理由カード」にマジックで文字を大きく記入しておくことで、そのまま黒板等への掲示ができるため、スムーズに話し合いが進行できる。



あらかじめ書いてきた「考え・理由」を掲示

③一人一人が活躍できる場を設定する。

集会の実践や準備などの活動で、一人一人が役割をもつようにする。しかしそれは、児童にとって活躍できる場でもあるが、活動の仕方が分からないなどの不安を与えることもある。そこで教師が、どのように活動したらよいか、手本を示すことにした。

また、係の活動の振り返りを定期的に行い、自己評価・相互評価をする。朝の会・帰りの会で、係の活動の取り組みを発表し合う場面をつくり、一人一人の成長を的確に把握し、評価する。

社会性をはぐくむために

①バリエーションのある集会の活動を取り入れる。先生といっしょにゲーム（1年生）

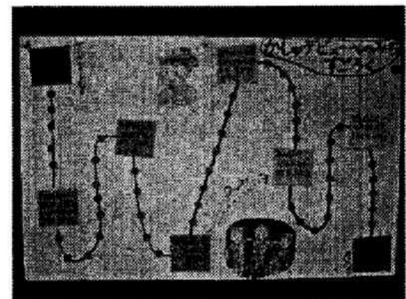
児童は、集会の活動を通して、自分自身の興味・関心が満足すると、活動の意欲が助長されることが多い。レクリエーション的な集会やスポーツ的なもの、さらに発表会的な集会など、場所や形態に変化のある様々な集会を紹介し、児童の選択の幅を広げられるようにする。また、協力し合ったり、責任をきちんと果たしたりしている姿を認め励ます。



【活動事例】

紙飛行機大会、チャレンジランキング大会、ミニオリンピック大会、すごろく大会、迷路作りなど

活動前に教師が示した見本

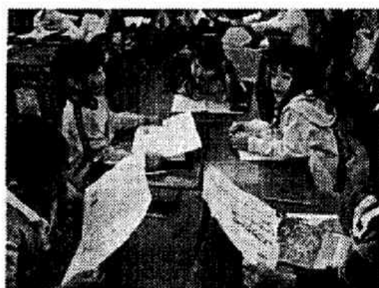


②モデルやいろいろな例を示す。

いろいろな例を提示することで、児童は「なるほど、そういうことができるのか。」「そういうやり方があるのか。」と気付く。また、1つのモデルや例を基に、児童なりのアレンジができ、考えや発想をふくらませることができる。

④ 話し合いの形態を工夫する。

小集団での話し合い



話し合いにおいて、なかなかアイデアが浮かんでこなかったり、大勢の前では萎縮してしまい意見が出せなかったりする場合や、全体の進行がうまく進まないときには、二人組やグループでの小集団の話し合いが有効である。

また、学級集団に返してみんなで意見を出し合う時は、学級全体での形態が望ましいと考えた。話し合いの内容や発達段階によって、形態を変える。

個人的資質を高めるために

④確実に取り組めるように、活動のパターンをつくる。

年間計画をきちんとたてると同時に、1つの活動の流れを「議題→話し合い→活動→振り返り」というパターンを作る。

⑤児童の決定権を阻害しないような適切な言葉がけをする。



視点II 「ドキドキわくわく・やったあ・またやりたい」といった体験を積み重ねるための工夫

視点iii「社会・個人的資質評価表」を用いた評価・指導・助言

○一人一人の社会的資質・個人的資質を点数化し、指導に生かす。

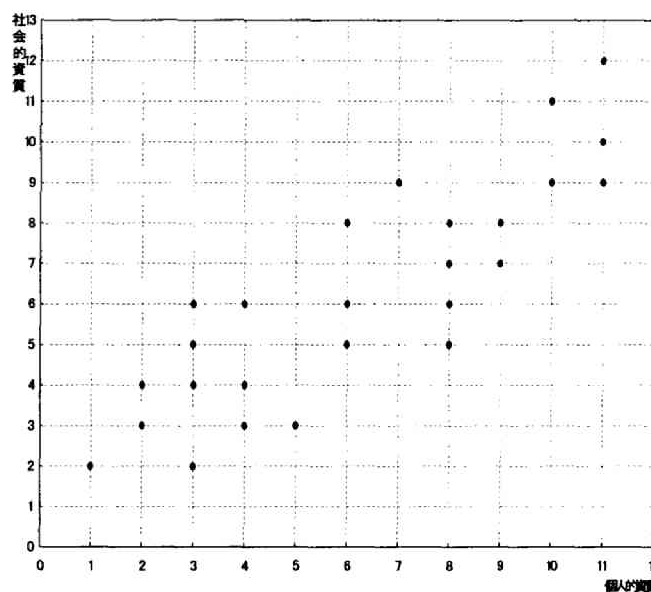
教師は、学級活動で育てたい力を明確にして一人一人の児童の変容を把握し、適切な指導・助言をしていくことが必要である。そのため、特別活動で期待できる力を社会的資質と個人的資質に分類し評価規準を作成した。その評価規準をもとに、教師が一人一人の児童を評価し点数化したものをグラフに表し（仮表）、一人一人の課題を明確にした上で指導を行うことにした。

社会的資質

- (1) 集団生活を支える力
 - ・役割遂行力
 - ・受容力
- (2) 集団生活を発展・向上させる力
 - ・組織運営力
 - ・目的達成力

個人的資質

- (1) 自己を見つめる力
 - ・発想力
 - ・提案力
- (2) 自己を表現し高める力
 - ・発想力
 - ・提案力



4 成果と課題

(1) 成果

3つの視点に対して具体的な手だてを考え、日々の実践に取り入れて活動を活性化することができた。視点1の手だて①においては、話合いの活動で回数を重ねるごとに、児童同士でどのような発言がよいのか、どのように進めればよいのかが分かるようになってきた。視点2の手だて「①バリエーションのある集会の活動を取り入れる」「②モデルやいろいろな例を示す」は分科会の主題でもある夢中になって活動できる内容を児童に示すことで、「もっとやってみよう」と意欲をもった活動ができるようになった。また、短時間で話し合い、それを実践に結びつけるという体験を繰り返してきた。それによって、中・高学年に向けての活動に幅をもたせることが期待できるようになった。視点3の手だては、社会性と個人的資質が高まるような教師の言葉がけや日頃の指導がとても大切なことで継続していく必要性を感じた。

(2) 課題

児童が夢中になって自らかわり、集団生活の中でお互いを意識しながら楽しく活動するには、1年生のうちから、話合いの基礎基本である「相手の話を聞く」といった態度の育成が課題となった。また、話合いで全員が関心をもちかわろうとする意欲をもつには、魅力ある議題や内容が不可欠であり、それらを教師がどう支援していくかが鍵となった。

評価については、社会的資質と個人的資質を高める手だてや評価項目の見直しが課題となった。またその評価を、どのように話合いの活動で生かすかが課題となった。

Ⅲ 4・5年分科会

安心して自分を表現し、ともに願いを実現する児童を育てる指導法の工夫

1 主題設定の理由

本来、児童期は社会性の面でもっとも急速な発達をする時期である。通常、10歳前後の小学校中学年頃から、子どもたちは同性・同年齢を中心とした密接な仲間集団を作る。発達心理学ではこの年代層を「ギャングエイジ」と呼ぶ。集団の中で、いたずらも含めてダイナミックに遊びを展開させる。

しかし、70年代の終わり頃から児童期の遊びの変化がみられるようになった。仲間集団が消失し、集団遊びの中で社会性を培うという独特の子ども文化がこの時期に消えていった。この遊びの変化が、子どもたちの社会性の有り様を変えた。現代の子どもたちにおいては、習い事の増加や遊び場所の減少により、集団遊びそのものがさらに後退してきている。それまでの「情緒交換遊び」から、2～3人の少人数でのテレビゲームをはじめとする遊具を通じた「情報交換遊び」への変質とも言われている（小林，2001）。

一週間のうち友達と遊んだ日数			休みの日・放課後に遊んだ遊び（複数回答可）		
1位	0日	63人	1位	ゲーム	205人
2位	2日	51人	2位	おにごっこ	63人
3位	1日	52人	3位	サッカー	35人
遊べなかった理由			学校の休み時間に遊んだ遊び（複数回答可）		
1位	塾・習い事	143人	1位	サッカー	51人
2位	家の事情	35人	2位	おにごっこ	32人
3位	体調不良等	7人	3位	バレーボール・どろけい	18人

本分科会研究員のアンケート調査より（17年9月実施）回答数：254名

本分科会研究員の学級児童へのアンケート調査の結果からは、上記のように塾や習い事に追われ、ほとんど遊ぶ時間がとれない現代の子どもたちの姿が浮かび上がる。遊びの内容についても、学校以外で遊ぶ場合には半数近くの児童がテレビゲームや通信型ゲームなど屋内での少人数の遊びをあげており、サッカー・おにごっこ・どろけい・野球・ドッジボールなど屋外での多人数の遊びが多くあがった学校の休み時間の遊びとの大きな違いが明らかとなった。

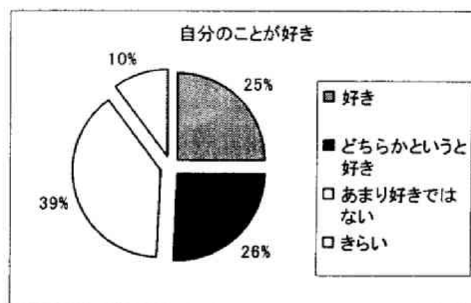
近年、集団遊びの消失や「私事化」（森田，1991）といった社会の変化を背景として、集団生活に不安を抱える児童が少なくない。このような社会の変化のなかで、現代の子どもたちが社会性を獲得する手段は学校生活の中に限られてきている。特に休み時間の遊びの中でそのほとんどを獲得しているという（奥野・小林，2005）。

このような児童の実態とその背景をふまえ、本分科会では児童の社会性の育成に不可欠な「豊かなかわり」を、学校生活の中で創出していくことを研究の柱とした。学級活動を中心として、さまざまなかわりの中で、密接な仲間の絆をはぐくむ手だてを講じることにより、力を合わせて、ともに願いを実現しようとする児童の育成につながるだろうと考えたからである。

社会性というと、「みんな一緒に仲良く」と発想されがちである。社会性は時代とともに変化

する。時代や社会環境が大きく変化してきている中で教育が目指す方向性は、子どもたちが生きる 21 世紀を大きく視野に入れていかなければならない。個性を尊重する時代の中で、自分の生き方を大切にするには、他人の生き方を大切にすることが必要であり、異なったもの同士が共生するために、必要最低限のルールを創出していく力が求められる。そして必要とあれば、少々の価値観の違いを越え、協力し合わなければならない。

このような社会性がこれからの社会に生きる子どもたちには必要なのだと思う。その上で、自分らしさを発揮するために、「約半数の児童が自分に自信がなかったり、他人からどう思われているか気になったりして、自分の意見を言うことに抵抗を示している」という児童の実態



からも、心理的に心地よい環境が学級でも形成されなければならないと考えた。安定した感情を持ちながら、互いの異なりをしっかりと確認する体験が必要になると考えるからである。

自分と他者とを比較する体験をそこで味わう学級は、他人と出会う場として大切な環境となる。比較なしには、自分の価値、自分の個性を確認することはできない。これを踏まえ本研究では、社会性の育成のためにも、個性の尊重や自分らしさを発揮できることを大切にしたいと考えた。

そこで、本分科会では、目指す児童像とそのための手だてを次のようにとらえた。

自分らしさを発揮し、ともに願いを実現する児童

かつての「ギャングエイジ」のような絆の強いかわり

個々のよさを生かしながら、仲間を集め、他者と力を合わせて
て団結する喜びを得る経験の積み重ね

自分も他者も認め合うことができる安心した学級の風土

目指す児童を育てるために、

- ・ 自分も他者も認め合うことができる安心した学級の風土の中で、
- ・ 個々のよさを生かしながら、仲間を集め、他者と力を合わせて団結する喜びを得る経験を積み重ね、
- ・ かつての「ギャング集団」のような絆の強いかわりをもつことによって、
それぞれが自分のよさを自分自身で認め、発揮し合った上でその力を合わせて、ともに願いを実現する児童が育つだろうと考え、本研究主題を設定した。

<引用文献>

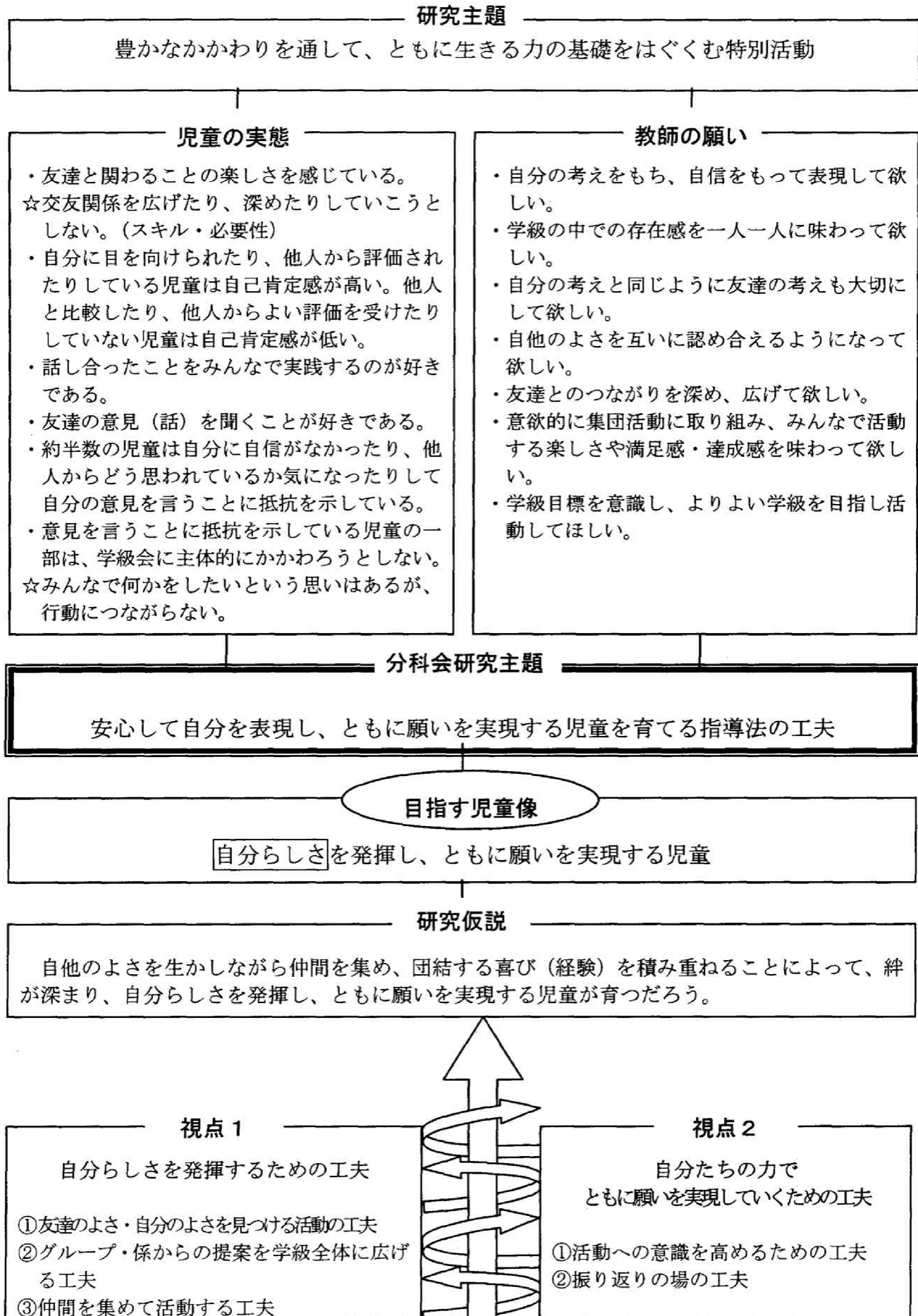
小林正幸：なぜ、メールは人を感情的にするのか　ダイヤモンド社　2001.

森田洋司：「不登校」現象の社会学　学文社　1991.

奥野誠一・小林正幸：相互独立性・相互協調性尺度の作成～信頼性および妥当性の検討～

東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要第1集　2005.

2 研究構想図



3 研究の内容

視点1：自分らしさを発揮するための工夫

① 友達のよさ・自分のよさを見つける活動の工夫

- ・学級会カードの活用：自分の考えをしっかりと持つことで、自分の考えを出せる喜びや友達との相違を知り、相互理解ができるようになる。
- ・学級会で決まったことに対して、一人一人がかかわっていけるようにする。また、自分らしさを発揮できる役割を与える。

② グループ・係からの提案を学級全体に広げるための工夫

- ・議題の誕生：何かをしたいグループや係などが声を出し、実現するために議題として提案し、それに賛成したい人は名前を書き込み、学級会で話し合う。このことを繰り返すことで、自分の思いを実現に向かって出せるようになり、誰かの思いを実現させるためにお互い受け入れ合う学級集団になる。
- ・「この指とまれ」方式：何かをしたい個人やグループで声を出し、係として集まったり、集会への議題をつくる。
- ・黒板・掲示板的活用：係やグループからの提案（誘い）を自由に知らせるスペースを確保する。
- ・係活動の充実：学級活動の時間で係活動のための時間を持ち、学級全体が盛り上がるような企画を考える。

視点2：自分たちの力でともに願いを実現していくための工夫

① 活動の意識を高めるための工夫

- ・見通しをもった話し合い活動：話し合い活動から集会活動までを短いサイクルで実施するために効率よい話し合いを行う。それにより、実践意欲が高まったまま集会活動を迎えることができ、また、集会活動の時間や回数を確保することもできる。このことにより、仲間とのかかわり合いの機会が増え、仲間同士での遊びや様々な活動に結びつくようになる。

② 振り返りの場の工夫

- ・要素カード：児童のよい気付きやみんなに広めたい発言や行動・つぶやきを取り上げ、具体的にカードに記入し、掲示することでその後の活動に生かすことができる。
- ・振り返りカード：学級会で決めた集会などの活動後に、振り返りの話し合いやアンケートを行い、よかった点や課題に気付き、今後の活動に生かしていく。また全員の意見を掲示することにより、自分と同じような考えの友達がいることを知り、その後の自分の意見を発表しやすくする。

話し合い→実践（ねらい・めあての確認）→振り返り→次の話し合い・活動

常時活動（視点1・2共通）

- ・朝の会の活用 ・20分休みなどにクラス全員で遊ぶ ・遊びの幅を広げる
- ・給食時間の活用（係の打ち合わせなど）
- ・クラスでがんばったことや友達のよさを発表、掲示する など

☆この指とまれ方式

何かをしたい個人やグループで声を出し合し、係として集まり集会の議題を作る

●実践例

- ・ 男子2名が「ビンゴ大会」を発案
- ・ 企画書を作り、学級会で提案
- ・ 時間や場所の確認し、ビンゴの回数など進め方について話合う
- ・ 折り紙係が以前から作りためていたものをビンゴの景品として活用
- ・ 折り紙係も作り方を仲間に伝授することができた

☆ 全員がビンゴになるまで続け、大成功

自分らしさを発揮し、

☆係活動

毎週金曜日、朝の15分間を係活動の時間とする。

- 活動の広がり
- 友だちの広がり

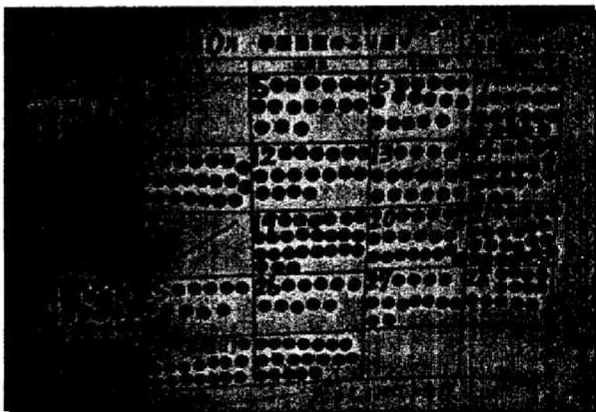
係で発表したことを休み時間に教え合う。

- ミニ集会へと発展
クイズ大会

☆議題の誕生

学級会で話し合いたい内容とその理由をカードに書き、掲示する。その議題に賛成の児童は、自分の名前を書き込んでいく。賛成の人数と適時性を考え、司会グループと教師で議題を決定し、知らせる。

学級目標の振り返り



☆学級目標を意識させる

毎日、「学級目標を意識して行動できたか」を自己評価した後、全員で振り返る時間を設ける。また、学級会や学級集会の後の終末の助言で「学級目標に近付けたか」や「学級目標に到達するためにはどうしたらよかったのか」などと投げかける。

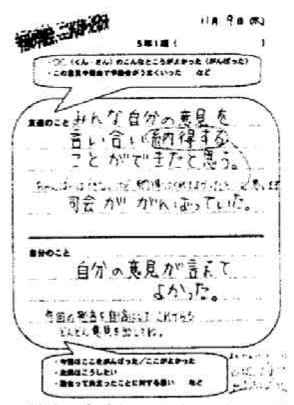
視点1

自分らしさを発揮するための工夫

ともに願いを実現する

☆学級会振り返りカード

話し合いの中で自分のがんばったところや司会グループも含めた友達のよかったところを見付け、発表し、認め合う。



学級会振り返りカード

★活動時間の確保と活動の流れの明確化

話し合い活動から集会活動までを2～3時間の短いサイクルで実施するために効率よい話し合いを行う。それにより、実践意欲が高まったまま集会活動を迎えることができる。また、集会活動の時間や回数を確保することができる。

●実践例

- * 議題名「みんなの絆を深めるための大会にしよう」
学級会で1時間
- ・ルールとチーム決めは計画委員会で事前に話し合ってから朝の会や帰りの会で提案し了承を得る。チームごとの作戦は学級集会までに時間外に話し合わせておく。
- * 次の学級活動の時間はサッカー大会を開催する。

☆活動後の振り返り

学級会で決めた集会などの活動後に振り返りの話し合いやアンケートを行うことで、よかった点や課題に気づき、今後の活動に生かしていく。

☆要素カード

学級会や学級集会の活動を組み立てたりする上で基礎となる児童のよい気づきや発言や行動、態度、つぶやきなどをそのままカードに記入して掲示し、定着を図る。これを積み重ねることにより、自分たちの力で活動していけるようにする。

視点2

自分たちの力で
ともに願いを実現して
いくための工夫

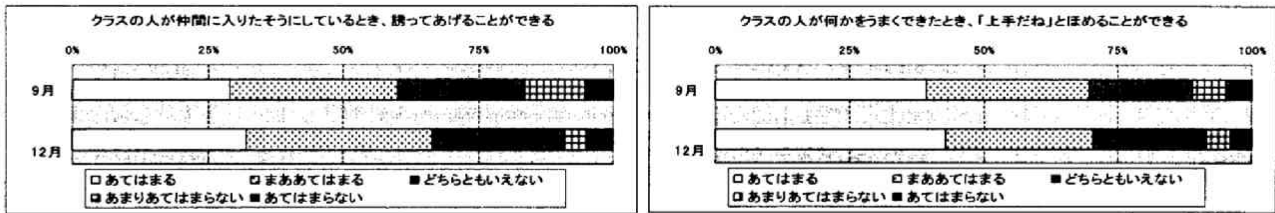
要素カード



4 研究の成果と課題

(1) 成果

ア、アンケート結果より



上のグラフから、次のことがわかった。

- クラスの仲間と誘い合ったり、助け合ったりする児童が増えた。
- 互いのよい所を認め合ったり、励まし合ったりする児童が増えた。

イ、研究の視点について

《視点1 自分らしさを発揮するための工夫》

- ☆話し合い活動から集会活動までを2～3時間の短いサイクルで実施した。そのことにより、活動全体を通して児童が活躍する場面が増え、自信をもって進んで活動するようになった。
- ☆学級会カードを活用し、事前に自分の意見を考えさせた。カードから多くの考えを取り上げて話し合ったり、教師がカードにコメントを記入したことで、話し合いの中で自分の意見を表明したり、自分の力で活動を盛り上げようと工夫したりする児童が増えてきた。
- ☆「この指とまれ」方式を使って係活動を行ったり、個人や小グループで学級会の議題を出したりすることによって、仲間をつくろうとする意識が高まり、集団に進んでかかわっていかうとする態度を育てる事ができた。

《視点2 自分たちの力で共に願いを実現していくための工夫》

- ☆仲間との関わり合いの機会を増やすために、材料・時間・場を与えた。教師の助言や友達の見解をきっかけに、仲間同士で遊びや新たな活動をつくるようになった。
- ☆活動を重視し、実践するために、学級会での話し合いを効率よく進めた。提案者が前もって内容を知らせることで、あまり時間をかけずに進められるようになった。
- ☆発案から実践までの過程で、「一人一人が役割をもつ」「自分達で仲間を集める」「自分達で計画する」「みんなでやり遂げる」といった経験を積み重ねた事により、協力する楽しさや大切さを実感する事ができた。
- ☆活動では、常に学級目標を意識させたことで、クラスをよりよくしていこうとする意見が多くなった。
- ☆話し合いや集会活動後に「振り返り」の場を設定した。その中で互いのよさや努力を伝え、認め合う事により、自分に自信をもって活動できるようになってきた。
- ☆活動後の振り返りをカードに書かせ、教室に掲示した。そのことにより、次の活動をよりよくしようとする雰囲気と知恵が生まれるようになった。

(2) 課題

- ★自分たちの力で活動を広げ、深め、新たな挑戦をしていくための助言の在り方
- ★話し合いの内容に応じた話し合いの時間の設定方法
- ★異なる価値観をもつ児童を結ぶ教師の支援の方法

実践への意欲を高める話し合い活動の工夫

1 主題設定の理由

6年分科会は、全体研究主題「豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動」を受け、ともに生きる力を他者への思いやりをもち協力する力、またよりよい方向に向かって、ともに考え実践する力であると考えた。こうした豊かな人間性や社会性は、全教育活動を通して育成するものであるが、特に特別活動への期待は大きい。

この豊かな人間性と社会性は、どのような行動がよりよいのか頭で理解しただけでは身に付いたとは言えない。また、「自分だけが満足するような活動」や「友達のいいなりになっている活動」をいくら繰り返しても身に付くものではない。やはり、「自分のよさを発揮するとともに友達のよさを認める経験」を通して実践的に身に付けるものなのである。

しかしながら、本分科会のどの学級にも、「学級集団とかかわることに消極的な児童がいる」「一部の児童のみが活動を行う」「自分の意見に自信をもてない」「議題を自分の問題としてとらえようとしない」などの課題があることが明らかになった。これでは、活動を通して友達とかかわることのよさを実感することができないばかりでなく、友達とよりよい人間関係を構築する経験を積み上げることはできない。

小学校6年生の担任の使命は、広く社会に出たとき実際に役立つ力、これからの時代に求められる力を確実に身に付けて卒業させることである。そこで、6年分科会の研究主題を「実践への意欲を高める話し合いの活動の工夫」と設定し研究に取り組むことにした。

ここでいう実践への意欲を高めるとは、学級集団の中で「自分も楽しく、学級の友達も楽しい」体験をするために仲間と協力して計画し、実行しようとする意欲を高めることである。それが実現できれば、小学校を卒業してもより主体的に人とかかわりを持ち、よりよい人間関係を築いていく力を身に付けることができると考えるからである。そこで、6学年担任として、最高学年の児童に期待する4つの願いを明らかにした。

- ・ 「みんなでやりたい」という実践への意欲をもってほしい。
- ・ 自分の考えに自信をもち、表現してほしい。
- ・ 自分らしさを発揮し、互いに認め合えるようになってほしい。
- ・ 社会の中で自分の思いを表現し、他者と共存する力の基礎を身に付けてほしい。

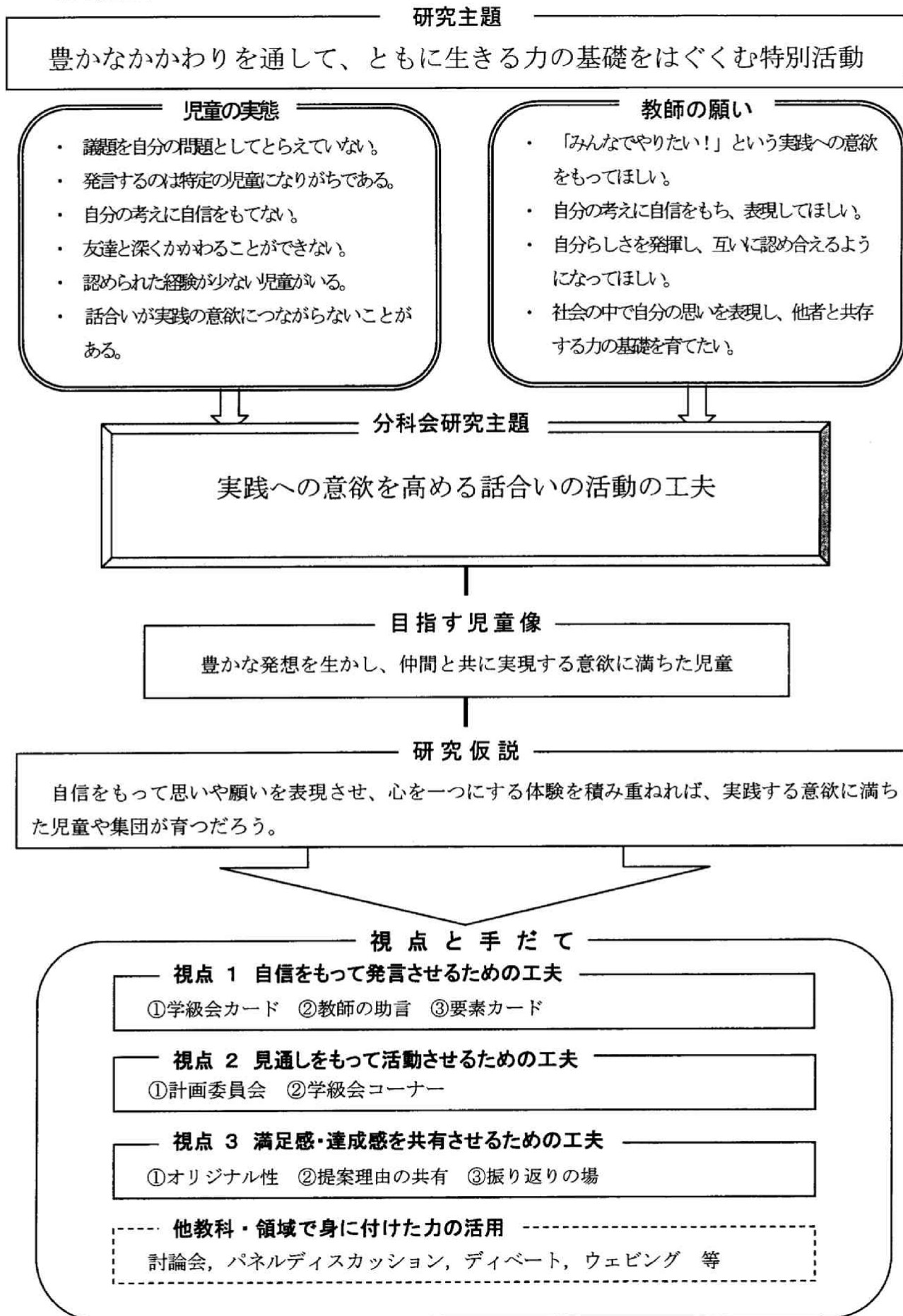
この4つの願いを基に、本研究では目指す児童像を次のようにした。

豊かな発想を生かし、仲間と共に実現する意欲に満ちた児童

しかし、「一部の子しか発想できない」「話し合いがうまくいくと満足してしまう」などの課題が残る。これらを解決し、児童像に近づけるために以下のような仮説を立てた。

自信をもって思いや願いを表現させ、心をつなげる体験を積み重ねれば、実践する意欲に満ちた児童や集団が育つだろう。

2 研究構想図



3 研究の内容

(1) 実態調査

視点と手だてを設定するにあたり、児童の実態調査を実施した。分科会研究主題「実践への意欲を高める話し合い活動の工夫」を捉えた上で、児童の学級活動に対する意欲と経験の関連を分析し、視点と具体的な手だてを設定することにした。

【アンケートの項目】*網掛けは意欲項目

(平成17年9月 研修員の所属する小学校6年生 16学級 計486名)

1	学級会活動で発言することが好きですか。
2	学級会活動でみんなと話し合うことが好きですか。
3	勉強グループになって活動することが好きですか。
4	学級会で決まったことをみんなが実践することは好きですか。
5	学級会をやったことがなかったと思ったことはありませんか。
6	学級会の前に、自分の意見を考えられていますか。
7	学級会では、新しい意見を思い浮かべますか。
8	学級会では、自分の意見は自信をもって発言できる方ですか。
9	学級会では、考えが思いついたときはいつも自分から発言できますか。
10	学級会で、自分の意見が取り入れられたことはありますか。
11	学級会では、自分の意見に賛成してもらったことがありますか。
12	学級会では、自分の意見に反対されたことがありますか。
13	学級会で話し合っ、クラスがよくなったと思ったことはありますか。
14	学級会では、友達の見解を聞いて自分の意見が変わったことがありますか。
15	学級会で友達の見解を聞き、自分の思いが強くなったことがありますか。
16	学級会では、友達と意見が違っても自分の意見を言うことができますか。
17	学級会で話し合っで決めた活動で、みんなで盛り上がったことはありますか。
18	学級会の勉強グループになったとき、学級会の前にどんな意見が出るかを予想したことがありますか。
19	学級会で決まったことは、進んでとり組む方ですか。
20	学級会で、友達にほめられたことはありますか。
21	学級会で、先生にほめられたことはありますか。
22	学級会での自分の意見がクラスをよりよくするために役立ったことがありますか。

学級活動の話し合いの活動の経験をアンケート調査し因子分析した結果、次の3つの経験をもつグループに分けることができた。

- よく発言し、自分の意見が取り入れられた経験の多いグループ → A 視点1
- 学級会に向けて準備をし、認められたと実感しているグループ → B 視点2
- 友達の意見をよく聞き、クラスのために行動できるグループ → C 視点3

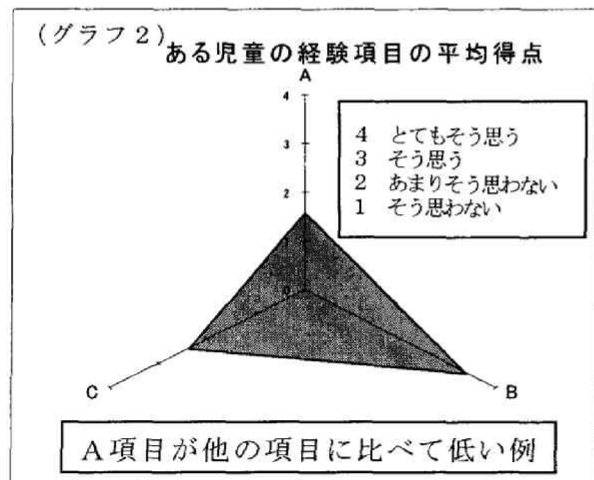
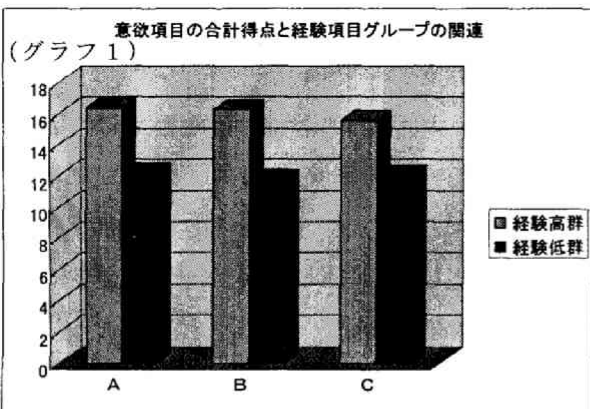
各経験をもつグループA、B、Cそれぞれにおいて、合計点数の上位25%を経験高群、下位25%を経験低群として、各群の児童の意欲の合計点数を比較した(グラフ1)。

その結果、すべての経験グループにおいて、経験高群の児童の方が、経験低群の児童に比べ、意欲が高いことがわかった。

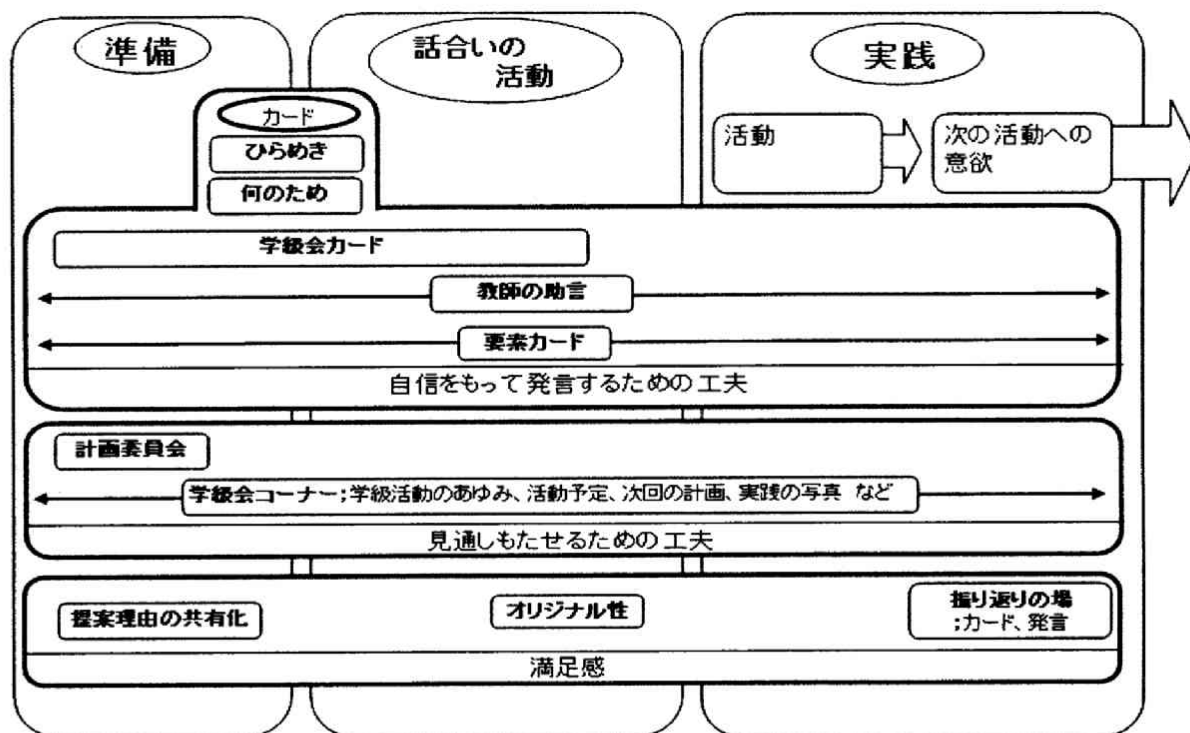
この結果を受け、A、B、Cのそれぞれの経験を十分に積ませることができれば、児童の意欲を高めることができると考え、研究の3つの視点を設定することにした。

A、B、Cの経験を個人別に分析すると、経験に偏りが見られる場合があった。これをグラフに表すと、個々の児童の課題をはっきりさせることができ、一人一人に応じた支援をすることができると考えた。

(グラフ2)の児童は、B項目である「学級会に向けて準備し、認められた経験」は多く積んでいる。しかし、A項目である「発言は十分できていない」ことがわかる。よって、B項目のよさを伸ばすと共に、より自信をもって発言する経験を積むことができれば、意欲が高められるとして具体的に支援することにした。



(2) 研究主題に迫るための手だて



視点1 自信をもって発言させるための工夫

手だて① 学級会カードの内容の工夫

計画委員から事前に議題、提案理由、話し合いの柱を聞き、学級会カードに自分の考えを書くことにより、自信をもって発言したり友達の意見との共通点や相違点を考えたりしながら話し合いに参加することができる。

教師は事前に学級会カードに目を通すことにより、一人一人がどのような考えをもって話し合いに参加しているのかを把握することができる。また、一人一人の考えを認め、励ますことで発言の意欲を高めることができる。

さらに児童の考えを広げたり深めたりするための手だてとして、「ひらめきカード」、「何のためカード」等を取り入れ、論理的な思考を高めることができる。

手だて② 意欲を高める教師の助言

教師の助言の場として、計画委員会、学級会カード、振り返りカード、話し合いの終末の場面が考えられる。よい点や工夫した点をほめることを中心とする。例えば、初めて発言をした児童、話し合いの進行を助ける発言をした児童、成長が見られた児童などを取り上げる。

課題については、いくつも提示せずに、1つか2つに絞って示す。その際、「～を改善するためにはどうすればいいかな」などの形で問いかけし、児童に学級の課題に気付かせ解決させるようにする。そのことで児童の主体性が生かされるようにし、意欲や達成感につながるようにする。

手だて③ 要素カードの効果的な活用

どの子もほめられたり認められたりすることにより、自分の考えに自信をもち次の活動への意欲を高めることができる。そこで話し合い活動の中での発言やつぶやき、また学級会カードや

振り返りカードの中から話合いに役に立つよさを見つけ、要素カード（名称はクラスのオリジナル性を生かす）として全体に紹介する。これにより、児童は望ましい話合いの方法を築きあげることができる。

視点2 見通しをもって活動させるための工夫

手だて① 計画委員会の活性化

【事前】

司会グループ、提案者、教師で構成する。休み時間・給食時間・放課後などに10～15分程度で行う。議題と提案理由を受け、どのように話合いを進めていくのかを考え、話合いの柱（項目）を決める。司会グループは話合いの柱を決めることにより、みんなから出る意見を予想し、話合いの計画を立てることができる。必要があれば原案を作成しておく。学級会の前に、計画委員会から話合いの柱を提示されるので、他の児童はその柱についての自分の意見をもって、学級会に参加できる。

【事後】

次の司会グループに前回の司会グループが加わり、話合いの進め方でうまくいった点や改善点等を引き継ぐ。それにより、次の司会グループが見通しをもって話合いの計画を立てることができる。

手だて② 学級会コーナーの充実

学級活動のあゆみ（係・集会・話合い）、集団としての学び（話し方・聞き方・司会の進め方）、今後の活動の予定（議題など）、次の学級会の計画（計画委員会から）、要素カード等を掲示し、全員が見通しをもって話合いに臨めるようにする。また、実践を行った際の写真や振り返りカードなどの掲示を行うことによって、次の活動へ意欲をもって取り組むことができる。

視点3 満足感・達成感を共有させるための工夫

手だて① オリジナル性の追究

実践でのオリジナルのやり方（集会のルールやネーミングなど）を考えることで、「このクラスだからできるんだ」という思いをもたせる。話し合って決めたオリジナルのやり方を実践で生かし、自分たちでがんばったという達成感を共有し、「このクラスでよかった」という満足感をもつことができる。学級会カードで振り返りの項目の一つに挙げ、自己評価させるようにする。これらの経験を積み重ねることによって、活動への意欲を高めることができる。

手だて② 提案理由の共有

児童が主体的に話合いに参加するには、議題の共有に加え、「何のために話し合うのか」という提案理由を一人一人が理解し、同じ気持ちで話し合うことが大切である。そこで提案理由に基づいためあてを設定したり、教師の助言により児童の意識を高めたりする。そのことによって議題から話合いの流れがそれることなく進めることができる。また、みんなが納得する話合いを経験することで、満足感・達成感を味わうことができる。

手だて③ 高め合う振り返りの場

具体的な振り返りの場としてカードの記入や発表、掲示を行い、自分や友達のがんばったことやよかったことなどを見つけ、認め合う。これらの振り返りを積み重ねることで、自分の成長や友達のよさに気付き、次の活動へのヒントを見付けることができる。

(3) 実践事例 ―ひらめきカードを生かして―

議題に対する発想を広げたり、話し合いの柱についての考えを深めたりするのに「ひらめきカード」を書くことが有効であると考え取り組んだ。使い方は、

- ・議題について書き、計画委員会で話し合いの柱を立てる時の参考にする。
- ・話し合いの柱について書き、自分の考えを深めて話し合いに参加できるようにする。

などが考えられるので、議題の内容に応じて使い分けることにした。

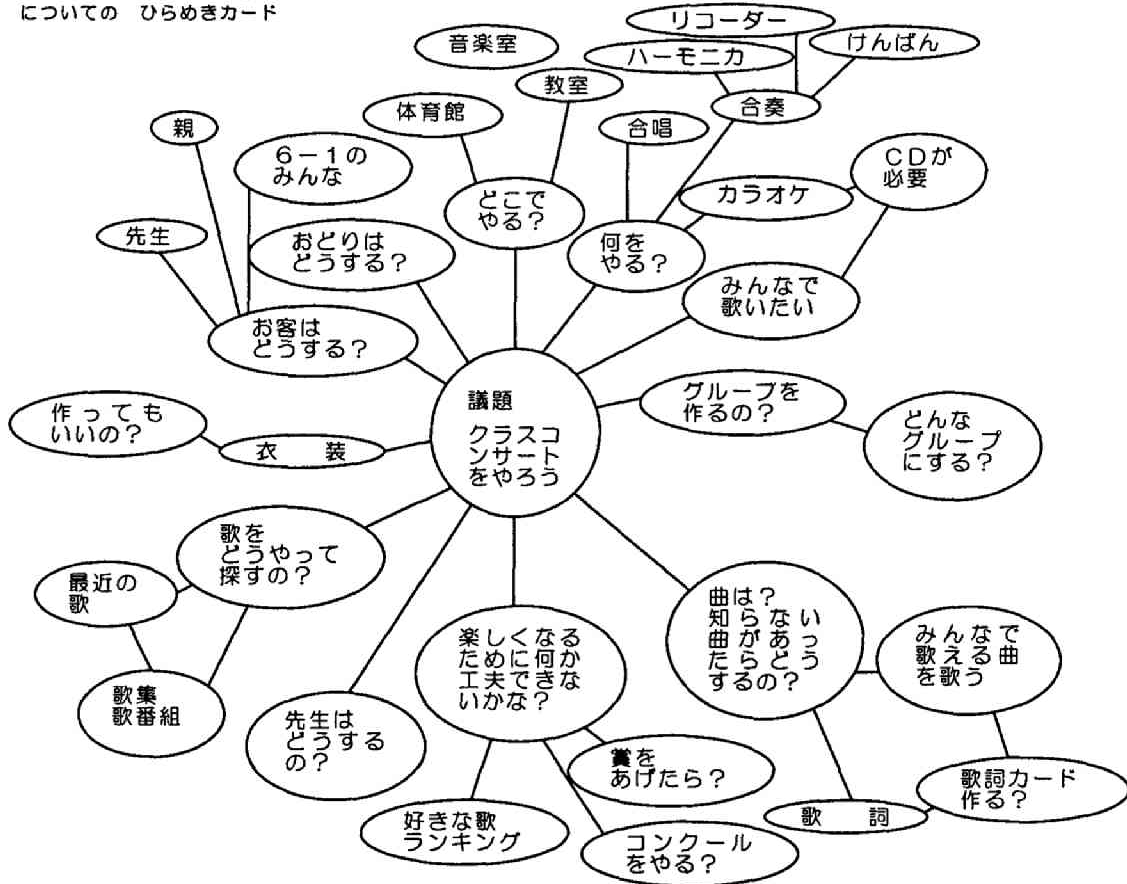
①議題名 「クラスコンサートをやろう」

②提案理由 音楽の時間に習わない歌を歌って、みんなでおもいきり楽しみたいから。

③ひらめきカードの使い方

一人一人が議題についてひらめきカードを書き、全員分まとめたものを計画委員会で話し合いの柱を立てる時の参考にした。

議題「クラスコンサートをやろう」
についての ひらめきカード



「ひらめきカード」を書くことにより、クラスコンサートについての一人一人の思いを知ることができ、それを話し合いの柱に生かすことができた。

[話し合いの柱]

[決まったこと]

- ① どこでやるか。
- ② 全員一緒にやるか、グループごとにやるか。
- ③ グループは、どのようにして決めるか。
- ④ 楽しくするために、どんな工夫ができるか。
- ⑤ 賞をつくるか。
- ⑥ お客はどうするか。

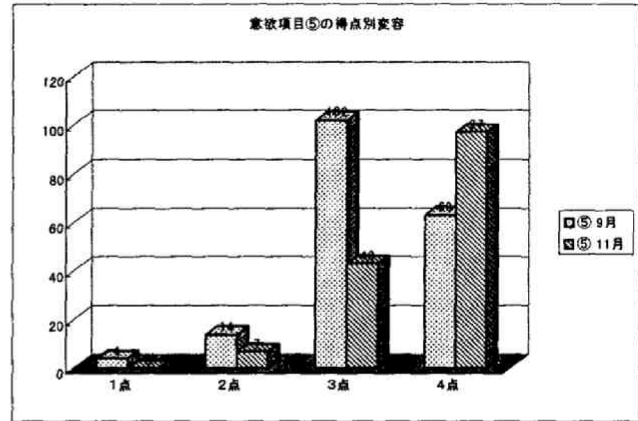
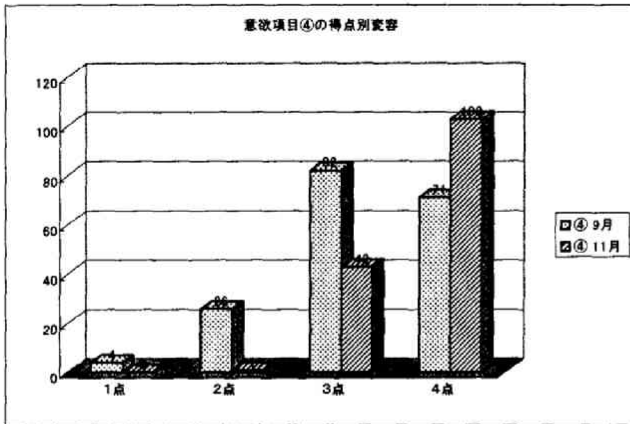
体育館でやる。
グループごとにやる。
好きな人同士でグループをつくる。
自分たちだけで楽しみたい。
賞をつくらずに、楽しむだけでいい。
グループごとに練習をして見せ合う。

場所は体育館でやることに決まったが、音楽会前で体育館を使えないので、屋上に変更した。
11月7日の5校時に行ったが、青空の下屋上で、どのグループも好きな曲をおもいきり演奏し、満足した様子だった。

4 成果と課題

(1) アンケート結果

本分科会では、児童の実態と変容をつかむため、アンケート調査を実施した。



本分科会が意欲としてとらえた5つの項目（1 発言する。2 話し合う。3 司会グループになる。4 実践する。5 学級会の達成感を得る。）全てにおいて学級会に対する児童の意欲が高まっていることが分かる。視点ごとに成果と課題をまとめ、更なる研究へとつなげていきたい。

(2) 成果

①「視点1 自信をもって発言させるための工夫」について

・「ウェブマップ」を活用することによって、計画委員会においては、話合いの柱が立てやすくなった。また、司会の児童にとっても事前に出される意見を予想できるので見通しをもたせることができるようになった。さらに、発言が苦手な児童にも事前に自分の意見を考えさせることができるので、発言できる児童が増えただけでなく、筋道を立てて考えることができるので内容の深まりにつながった。

・「何のためにカード」の活用は、話し合うことの目的意識を児童にもたせることができ、提案理由を共有することができるようになり内容を深める意見が増えた。

「要素カード」の活用は、児童が築いたよい面が継続的に残るため、活動の高まりにつながった。

②「視点2 見通しをもって活動させるための工夫」について

・議題を張り出すことが、互いに考えを交流できる場となり、みんなが納得して議題を設定することに生かされた。

③「視点3 満足感・達成感を共有させるための工夫」について

・計画・話合い・実践を振り返りは次の話合いに生かされ、よりよい実践につながった。

【3】課題

①「ひらめきカード」は児童の発想を促すためには有効であったが時間がかかるので、「ひらめきカード」の効率的な活用方法の開発。

②「ひらめきカード」の活用でもてるようになった考えを、発言につなげる指導の在り方。

③あらゆる場面での、児童の発想を発言につなげる教師の働きかけ。

り」を基に「ともに生きる力」の基礎をはぐくむための実践的な研究を進めることにした。

V 研究の成果と課題

研究を始めるにあたり、まず、各研究員の学級において学級会活動の様子を改めて観察することにした。その結果、楽しい学級集会についての話し合いの中で、根拠の無い反対意見が増えたこと、楽しいはずだと思って行っていた集会活動の中で、表情が硬い児童がいること。学級の議題を考えさせても、「どんなこと書いたらいいですか」とすぐに質問にくる児童がいることなど、よりよい集団活動を目指して積極的に取り組もうとする姿勢が感じられない児童が増えていることが浮き彫りになった。

このことを解決するためには、これまでの特別活動の取り組みを見直し、現代の子どもたちに必要な新しい特別活動を行う必要があると考え、現代の子どもたちの発達の課題に応じた分科会を設定し、「豊かなかかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動」を目指して研究に取り組むことにした。

1・2・3年分科会（集団活動の楽しさを実感できる基礎的な指導の充実）

4・5年分科会（集団活動の楽しさや役割の遂行の大切さを実感する指導の充実）

6年分科会（集団へ積極的にかかわり、実践への意欲を高めるための指導の充実）

1 研究の成果

- (1) 「社会・個人的資質評価票」に基づき児童一人一人の実態を把握し、児童の社会性や個人的資質をはぐくむための具体的な手だてを行うことにより、集団活動により積極的に取り組む児童が増加した。
- (2) 児童が自ら自他のよさを生かしながら仲間を集め、団結する楽しさ積み重ねるために、「自分らしさを発揮するための工夫」や「自分たちの力でともに実現していくための工夫」を意図的に行うことにより、友達同士の絆を深める活動を充実させることができた。
- (3) 児童の意欲と学級会活動の経験をアンケート調査した結果に基づき、自信をもって発言するための工夫・見通しをもたせる工夫や満足感・達成感を共有させるための工夫を行うことにより、意欲的に集団活動に取り組む児童が増えた。

2 研究の課題

- (1) 社会的資質と個人的資質の評価項目の見直しを行い、一人一人の児童の実態をよりの確に把握し指導できるようにするとともに、「相手の話を聞く」などの基本的な事項の指導の充実を図るための研究を継続する。
- (2) 児童が自分たちの力で活動を広げ、深め、新たな挑戦をしていくための教師の助言の在り方に関する研究を継続する。
- (3) 異なる価値観をもつ児童を結ぶ教師の支援の研究を継続する。
- (4) 児童の実態に応じた発想を促す方法の開発と活用方法の検討、及び、学級の課題を共有化するための教師の言葉がけの研究を継続する。

平成17年度 教育研究員名簿（特別活動）

	市区町村名	学校名	氏名
低学年分科会	新宿区 品川区 葛飾区 八王子市 青梅市	西戸山小学校 源氏前小学校 上平井小学校 大和田小学校 第二小学校	太田 和宏 五頭 和美 ○神谷 なおみ 及川 裕美 和田 友美
4・5年分科会	墨田区 世田谷区 杉並区 北区 足立区 国分寺市 国立市 武蔵村山市	小梅小学校 千歳小学校 三谷小学校 西浮間小学校 竹の塚小学校 第八小学校 国立第二小学校 第三小学校	栗原 かおり 大橋 順子 山川 旬子 佐藤 卯木 鈴木 厚子 日浦 雅 根本 成明 ○原 かおり
6年分科会	大田区 中野区 板橋区 練馬区 足立区 足立区 府中市	六郷小学校 向台小学校 志村第五小学校 光が丘第一小学校 梅島小学校 梅島第二小学校 南白糸台小学校	猪岡 仁 小林 武 山田 菜穂子 飯田 はるみ ◎檀特 明子 ○岩脇 真由美 小坂 はる江

◎総世話人 ○世話人

担当 東京都教職員研修センター統括指導主事 大熊 雅士

平成17年度教育研究員研究報告書

〔東京都教育委員会印刷物登録〕
平成17年度 第12号

平成18年1月16日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒一丁目1番14号
電話番号 03-5434-1974

印刷 株式会社 今関印刷